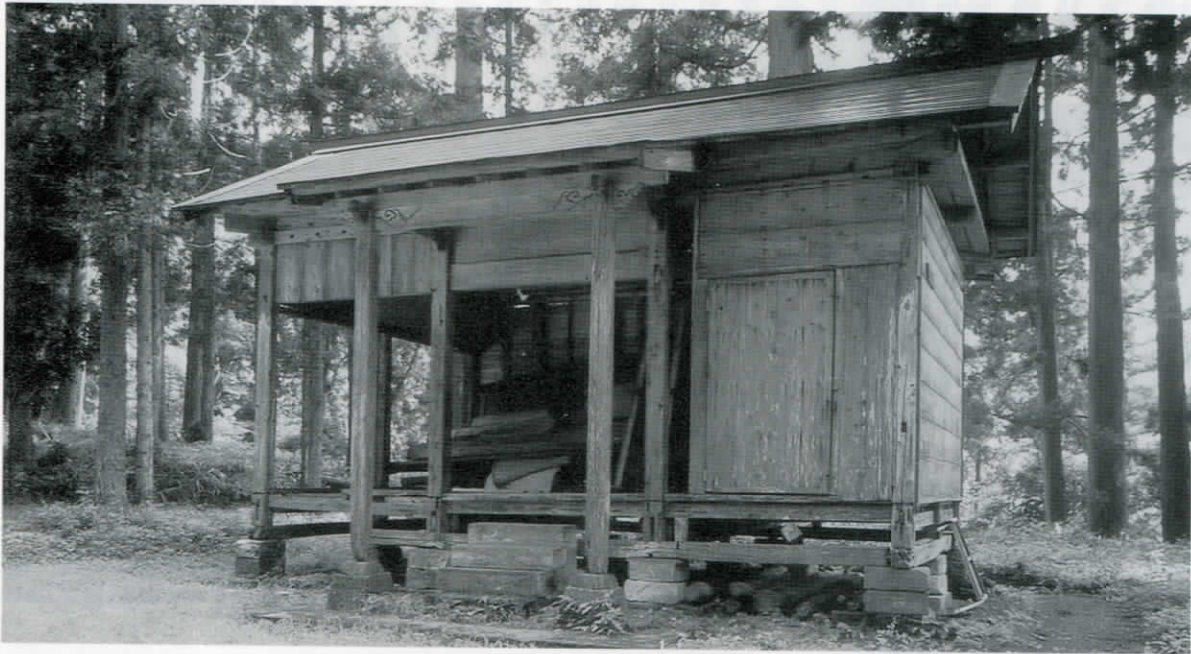


# かも市史だより

平成26年10月  
No.30

◆編集発行 加茂市幸町二丁目3番5号 加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480



▲ 神楽殿 全景



▲ 向拝の渦巻き彫刻



▲ 向拝のつなぎ虹梁

## 猿毛・日吉神社の神楽殿

猿毛・日吉神社境内の南西隅に神楽殿が建っています。規模は梁間三間・奥行二間で、向拝一間が付く平入の建物です。明治末年、大正時代頃に日吉神社を新築するさい、旧本・拜殿を転用して設けられたとされています。

神楽殿は改造をしていますが、柱や軒廻りには多くの痕跡が残っており、かつての姿に復原することが可能です。まず、屋根は切妻造の金属板葺となっていますが、元来は寄棟造の茅葺で、床面から上部には正面及び両側面の三方に庇が廻り、下部には同じく三方に縁が廻っていたと判断されます。また、内部は仕切られ一部は物置となっていますが、元は間仕切りのない一室構成で、中央間の背面側には祭神を祀ったと思われる構えが残っています。現在、神楽殿の壁面は取り払われていますが、柱の痕跡から考えると元は横板戸を嵌め込んでおり、閉鎖性の高い建物だったと考えられます。

明治十六年に新潟県へ提出された「神社明細帳」をみると、旧社殿は元禄十三年（一七〇〇）の竣工です。向拝のつなぎ虹梁の曲線は緩やかで、浅く正円形に近く彫られた渦巻き彫刻からみると、この年号には妥当性があります。市内有数の古さを保つ建築です。

# 移動図書館

# 「いずみ号」

## ブックモービルの構想

加茂市が誕生した昭和二十九年（一九五四）三月、新潟日報社の企画で金田市長や旧下条村の渡辺元村長などが出席し、「新加茂市を語る」という座談会が開かれた。そのなかで、図書館兼公民館長の小松辰蔵は合併して広域化した加茂市に「ブック・モービル（移動図書館）」を導入したいとの構想を語っています（『新潟日報』昭和29・3・19）。

図書館では加茂町時代の昭和二十七年六月から「巡回文庫」と名づけ、町内の青年団や企業等に貸し出すサービスを行っていました。が、このサービスは二〇人以上の団体が対象で、一〜二か月に一度、三〇〜五〇冊を貸し出すという形式になっており、頻度・冊数ともに限界がありました。また、当時図書館は公民館と同じ建物に入っており、公民館事業があると図書の閲覧は制約を受けました。そのため多くの書籍を積んだ専用車を導入し、図書館へ来ずとも町場から離れた市民が図書を利用できるように

するこの構想は、広域化した新加茂市に待望された政策だったのです。

## ブックモービルの導入

自動車によるブックモービルの導入は、市制施行から約二年を経た昭和三十一年五月に実現します。その目的は教育の機会均等と新たな読者層の開拓のため下条・七谷・須田の各地区を回るといふもので、長岡市に次ぐ県下で二番目の導入でした。しかし、中古車の屋根に大型スピーカーを取り付けるなどの改造を施したこの車は、図書館と公民館が同じ建物にあったことを反映して、自動車文庫の機能を

併せ持つ「移動公民館」という位置づけがなされます。各種集会が活発であったのに情報伝達の手段が未発達だったこの時期、車には公民館事業の広報と宣伝も期待されていたのです。

## 「いずみ号」の誕生

こうして発足した移動図書館は好評で、千二百冊余を乗せ、一八か所を年一二〇日にわたり巡回し、多くの利用者を集めました（加茂市立図書館所蔵文書）。ところが中古車を悪路もいとわず使用したため消耗が激しく、翌三十二年には廃車となり、事業も一時中断しました。そこで昭和三十三年七月、国庫補助金を得て新しい自動車を購入され、八月には運行が始まりました。この車両は一般公募により「いずみ号」と命名され、この

のち長く親しまれます。

昭和四十年、いずみ号は新調されました。車体側面の扉が上下に開いて書棚が現れる仕組みの車両で、このさい公民館との兼用もなくなり、図書館専用車となりました。また、配本所（「ステーション」といわれた）も二十七か所に増え、狭口や石川・加茂新田といった旧加茂町域を含む市域のほとんどを巡っています。さらに昭和四十八年頃に後継の新型車両が導入されましたが、勤め人が多くなり、地域に日中不在の留守家庭が増えるにつれて利用者は減少し、昭和六十三年度をもってその役割を終えました。しかし、いずみ号の愛称は、市立図書館の公用車に今も使われ続けています。

（近現代部会 中山之隆）



▲ 移動図書館の変遷 昭和31年導入車（上）・33年導入の初代「いずみ号」（中2枚）・40年導入の二代目「いずみ号」（下）



# 下黒水「寒倉講」の祭祀用具

市内で最後まで残っていた下黒水の「寒倉講」が活動を終えることになりした。霊力を身につけるべく厳しい寒行に励むこの講は秘匿性が高く、衣装や道具が講中以外の人の目に触れる機会はほとんどありませんでした。このほど民俗資料館に寄贈された道具から何点かを紹介します。

## 寒倉講の信仰

「寒倉講」は、寒倉大権現を信仰するムラ人の講で、かつて七谷地区の全集落に組織されていました。講では、十二月二十四日の祭礼日には水垢離をとり念仏を唱え、除災のためのお札を配布し、通夜には死者を弔う念仏を唱えるなど、ムラ人と深く関わりながら活動をしてきました。講の祭祀用具には、

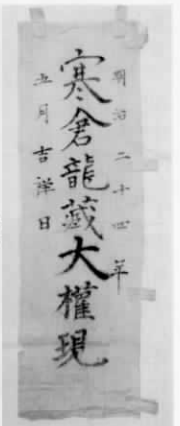
白装束一式・寒倉大権現のお姿（掛軸）・鉦（七点）・撞木（九点）・燭台・オカミユウテ・お札（四七枚）・版木・旗・祭壇・念仏本などがありません。

「寒倉講」のご本尊である寒倉大権現のお姿（掛軸）は、講にとって最も大切なもので、常は親方が管理します。長さ一四八センチメートル・幅三四センチメートルで、文覚上人が那智（和歌山県）で滝行をしている絵が描かれています。文覚は源頼朝の知遇を得て鎌倉幕府の要人として活躍した人物で、霊力を持つ修験者として知られています。他集落の「寒倉講」の掛軸は、ほとんどが「寒倉大権現」「寒倉龍蔵大権現」などと文字のみで書かれているので、下黒水のもは他に例がなく貴重です。

## 寒倉大権現の掛軸



▲ 文覚上人を描いた本尊



▶ 旗 祭礼時の幟に用いた（明治二十四年）

## 鉦と撞木

掛軸の裏には、「明治十六年十一月十八日」の日付と「寒倉龍蔵大権現」の名号、それに世話人として梅田七造以下一三人の名前が書かれています。世話人の数からも講員の多さが推測されます。

念仏を唱えるときになくはならないのが鉦と撞木です。講では、鉦を撞木で打ちながら南無阿弥陀仏を繰り返す長念仏を唱え、親方が音頭取りを勤めます。

鉦のうち一つは、裏側の縁に升衛門以下一〇名の名前が彫られています。撞木のうち一つは、表側に南無阿弥陀仏と書かれ、裏側に



▲ 鉦 表面（上）と裏面

文覚上人が那智の滝行をするお姿から熊野信仰との関わり、南無阿弥陀仏を唱える長念仏から阿弥陀信仰との関わり、水垢離などの寒行から山岳修験との関わり等が考えられ、寒倉講が複雑な要素を持つ、庶民信仰であることがわかります。（民俗部会 岩野笙子）



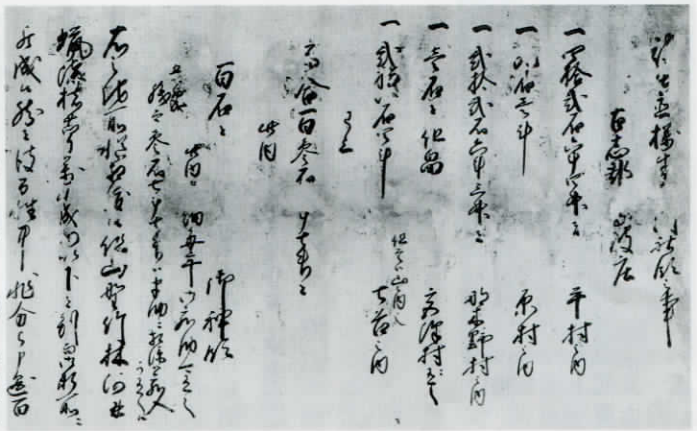
▶ 撞木 表面（右）と裏面

「昭和式拾八年拾貳月 施主坂上政吉」などと年号及び氏名が書かれています。

# 山之内と七谷

現在の加茂市の大部分は、中世には青海荘という荘園に含まれていました。十五世紀末に作成された「蒲原郡段銭帳」という史料では、青海荘は市域の上条・下条のほか井栗条（三条市）・坂田条（田上町）・藁口条（新潟市南区）・小吉条（新潟市西蒲区）・河骨川条（山之内条の八か条に分かれていきます。河骨川は川船河（田上町）とみられます。

大半は現代に直結して用いられている地名ですが、山之内条だけはみあたりません。しかし、これを解明する史料があるのです。慶長二年（一五九七）に上杉景勝が栃尾（長岡市）の守門神社の神職に給与した土地の一つに「七谷之内」と地名を挙げ、その右肩に「但是ハ山之内也」と但し書きで注記しています。ここから、七谷はもと山之内と呼ばれていたことがわかります。では、山之内から七谷へ呼称が切り替わったのはいつのことだったのでしょうか。「七谷」という地名の初見は文禄三年（一五九四）です。この時期は、上杉謙信の後継を景勝と景虎が争い天正六年（一五七八）に起こった「御館の乱」を経て、旧



守門神社領の書き上げ（部分、見附市 渡辺謙一郎氏所蔵）慶長二年（一五九七）。古志郡の平村・原村・宮澤村（長岡市）、那木野村（見附市）と並んで七谷の地名がみえる。「但し書き」が付いているのは、同じ社領でも七谷は郡域が異なることを示している。

来の国人領主が上杉景勝の統治に服した時期にあたっています。山之内から七谷へ呼称が切り替わった背景には、統治の仕組みの変更があったことが考えられます。その場合、掲出した守門神社宛ての文書は地名が切り替わる過渡期の史料ということになります。（考古・古代・中世部会 金子 達）

# 加茂朝学校の校歌

大正九年（一九二〇）、「業学一如」の人格修養の場として創立された加茂朝学校は、同十五年より全校生徒を宿泊させ、この年十月になると私立中等学校（各種学校）に認可されました。昭和四年（一九二九）には校舎を新築し、さらに十二年に私立中学校の認可を得るなど組織整備が進展し、入学生も増加の一途をたどりしました。

そうしたなか、校長の西村大串は校歌制定の構想を練り、歌詞は大串校長が全四番まで書き下ろし、曲は朝学校音楽講師の鈴木啓太郎が付けて、昭和十三年九月十日の創立十八周年記念日に発表会が開かれました。歌詞には学校周辺の情景や伝統、大串校長の理想とする人間像が盛り込まれました。四番は「あゝ悠遠の日の本の 聖の教かしこみつ 八紘一宇皇国の 柱石たらむいざや友」と、戦時を反映した中身となっています。

しかし、この詞が歌い継がれることはありませんでした。昭和二十年八月に日本は敗戦を迎えましたが、この年の春に入学した生徒は、夏休みが明けた二学期から四番は歌われなくなったと語っています。朝中学校（昭和十八年に朝



朝学校校歌の原譜（昭和十三年八月付、松坂町 大昌寺所蔵）

学校から改称）ではいち早く戦時下の四番を削除し、新時代の到来に備えました。（民俗部会 中山 勇）